

『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第四十九号 抜刷（二〇二二年十二月）

【研究ノート】

海老名・相模国分寺不動明王坐像について

神野祐太



図2 同 全身背面



図1 不動明王坐像 全身正面 海老名・国分寺



図4 同 全身右側面

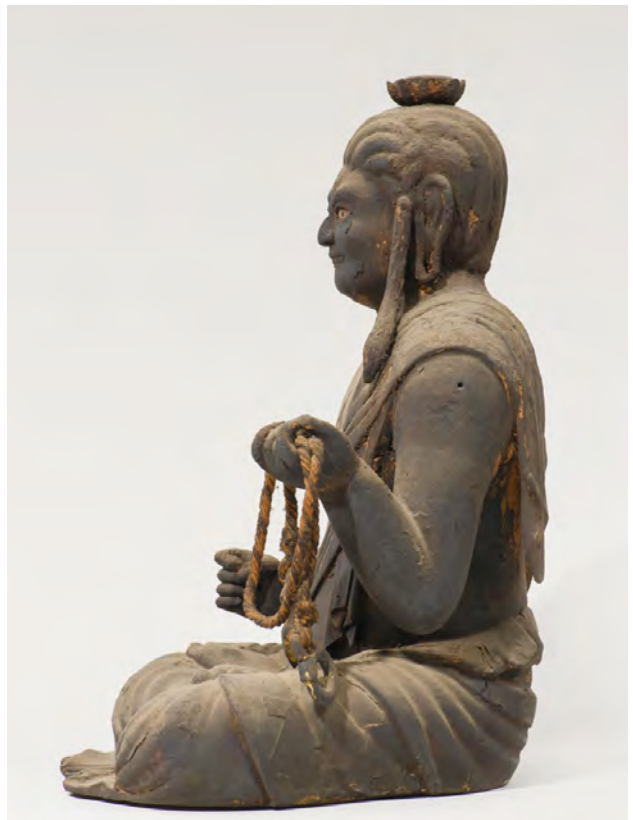


図3 同 全身左側面



図6 同 顔背面



図5 不動明王坐像 顔正面 海老名・国分寺



図8 同 顔右側面

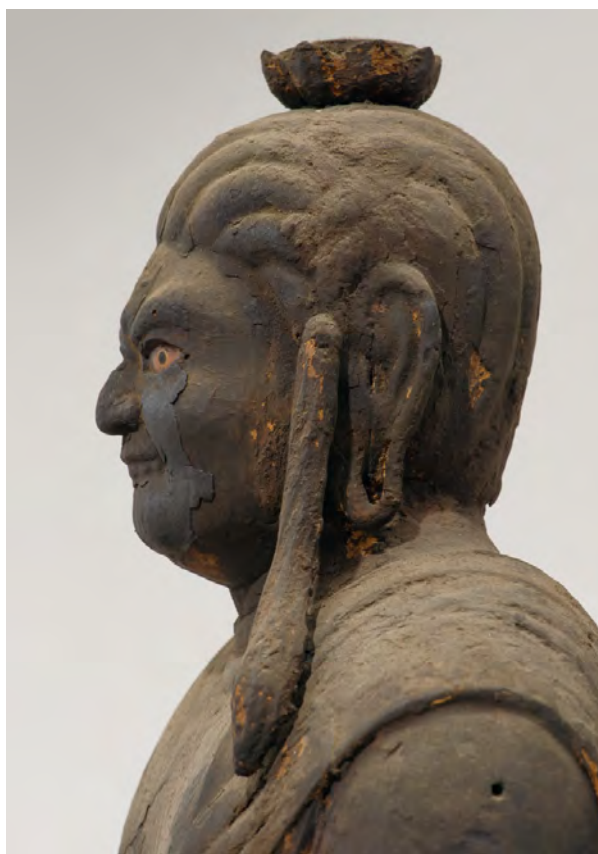


図7 同 顔左側面

## 【研究ノート】

## 海老名・相模国分寺不動明王坐像について

神野 祐太

## 【キーワード】

奈良仏師 相州大山 玉眼 弘法大師様

## 【要旨】

海老名市の国分寺に伝来する不動明王坐像について紹介する。本像は、令和二年（二〇二〇）に神奈川県立歴史博物館で開催した特別展「相模川流域のみほとけ」に出陳され注目を集めた。作者はその作風や構造から平安時代後期の奈良仏師が想定される。ただ、国分寺の歴史については不明な部分も多く、江戸時代の地誌『新編相模国風土記稿』に本像とみられる記述があるくらいで、伝来についてはよくわからない。伝来については不明な点が多いものの、東国に伝わる平安時代の奈良仏師の作例はすくなく、今後の東国における彫刻史を考える上でも重要な作例と考えられることから、概要を紹介するとともに若干の考察をおこなった。

## はじめに

国分寺は、神奈川県海老名市国分南に所在する真言宗の寺院である。天平十三年（七四二）の国分寺建立の詔によって全国に建立された国分寺を継ぐ寺院で、現在の境内地から約一五〇メートル北側には古代の相模国分寺跡（国史跡）がある。

本稿でとりあげる不動明王坐像（図1～図11）は、本堂の須弥壇上に安置される。これまで山田泰弘氏<sup>①</sup>によって鎌倉時代の優品として紹介された<sup>①</sup>ことがあり、海老名市の彫刻悉皆調査<sup>②</sup>で調査が実施され、概報は出版されたものの詳細は知られていなかった。本像は令和二年（二〇二〇）秋、神奈川県立歴史博物館で開催された特別展「相模川流域のみほとけ」で初めて寺外で公開された。筆者は特別展の担当者として本像の事前調査を実施し、十二世紀半ばから後半の奈良仏師の作品に通ずる作風や構造に注目した。特別展図録に図版と簡潔な解説を掲載し、その後、科学研究費の研究報告書を刊行し、基礎データを提示した。本稿はそれらを踏まえて、他の奈良仏師の作品との比較研究、『吾妻鏡』を用いた伝来の考察、伊勢原市・大山寺に伝わる不動明王像との比較を実施し、改めて日本彫刻史・相模国彫刻史の中に位置付けてみたい。そのため前著との重複があることを予めお断りしておきたい。

## 一 像の概要

本像の概要を記述する。本像は正面を向き両目を瞑目とし上歯で下唇を噛み、右足を上にして結跏趺坐する不動明王像である。像高三〇・四cm、髮際高二六・八cm<sup>③</sup>、髮際で一尺六寸を測る。ヒノキ材とみられる針葉樹材を使用する割矧ぎ造りで、表面に彩色をほどこし、玉眼を嵌入す



図9 不動明王坐像 海老名・国分寺

る。光背（頭光、高一三五・八cm、木製、彩色）と台座（蓮華座、高五四・〇cm、木製、彩色）は江戸時代の後補とみられる。

形状について述べる。頭頂に蓮華（蓮肉と七枚の花弁）を戴き、頭髪部は総髪とし、左の側頭部で正面と背面の髪束が編み込まれ弁髪に続く。弁髪は紐でくくらず左耳前を通り肩に垂れる。右の鬢髪を蔵手状にあらわす。額にしわをあらわさない。眉根を寄せ瞼目とする。上歯六本で下唇を噛む。顎の括りをあらわす。耳垂部環状。三道相。上半身に条帛、下半身に裙・腰布・腰帯を着ける。条帛は左肩から背面に一端を垂らし、正面から右腰脇を通って初層の下から再び左肩に懸かり、胸前で初層の上から折り返し裏をみせる。裙は折り返し付き。腰布は大腿部を覆う。腰帯は背面でややたるませて縁を折り、正面で結び目をあらわす。両手屈臂。左は掌を上に向け五指を捻じ、絹索（後補）を執る。右はやや肘を張り掌を内に向け五指を捻じ三鈷剣（後補）を執る。顔は正面を向き、右足を上にして結跏趺坐する。

次に構造について述べる。頭体幹部は一材製で、左耳前方、右耳半ばを通る線で前後に割矧ぎ、内削りのうえ割首する。左右腰脇に三角材をそれぞれ矧ぐ。両脚部は横木一材製。以上の材には内削りを施す。内削りはノミ目を残さない丁寧な仕上げで、全面に布貼りを施す。裳先に別材を矧ぐ。両肩先は、肩、上膊半ば、肘、手首でそれぞれ矧ぐ。両肩先材と体幹部材は柄でそれぞれ固定する。蓮華・弁髪・条帛両端にそれぞれ別材を矧ぐ。背面の裙の折り返し部に薄材をあてる。表面は錆漆下地の上に彩色する。臂釧・腕釧を付けていた痕が残る。

現在まで複数回の修理が施されているようである。そのため次のような細かな修理や後補部分がある。頭頂の蓮華・弁髪・条帛の正面の端・右手首先・裳先・絹索・三鈷剣（木製、長二二・七cm）・両耳朶・背面の薄



図 11 同 頭頂



図 10 同 像底



図12 不動明王坐像 京都・北向山不動院

材・条帛の右脇から背面にかけて金地に赤色の彩色・玉眼（瞳は中心から黒色、金色で縁取り暗い赤色とする。白眼は白色。目頭と目尻は赤色）・左手首先である。

江戸時代の地誌『新編相模国風土記稿』巻六十四、国分寺条によれば、「客殿には弘法大師及不動地蔵の像を安ず」とし、この客殿に安置されていた不動明王像が本像にあたる可能性が高い。なお、中山每吉氏の『相模国分寺志』では、明治四十三年（一九一〇）に焼失した仏像一覽の中に「不動明王 座像 九寸九分（木彫）」とみえる。像高がほぼ等しく本像に当たると思われるが、大正十一年（一九二二）と昭和二年（一九二七）の什物帳にそれぞれ記載があることから、焼失を免れて救出されたと考えられる。

## 二 製作年代と作者

『新編相模国風土記稿』以前の伝来については不明であり、本像には銘記の類が認められないため、類似する作例と比較することで製作年代や作者系統について検討する。

しっかりと肉付けされた頬や顎には、平安時代末から鎌倉時代初頭の運慶や快慶らの奈良仏師及び慶派仏師の作風を想起させる。一方で、後ろに盛り上がった後頭部、彫りの浅い衣文線、やや腹の出たプロポーションから、平安時代の定朝様式をも色濃く残すことが見て取れる。つまり本像は、定朝様式と鎌倉新様式の要素をあわせもつ十二世紀半ばから後半の奈良仏師系統の作風を示すといえる。

この頃の奈良仏師の作例は、仁平元年（一一五二）の奈良・長岳寺阿弥陀如来及び両脇侍坐像、久寿二年（一一五五）に完成した京都・安楽寿院不動堂に安置されたとされる北向山不動院不動明王坐像（康助作）（図12）、安元二年（一一七六）の奈良・円成寺大日如来坐像（運慶作）、治承元年（一一七七）の静岡・瑞林寺地蔵菩薩坐像（康慶作）がある。他に造像銘記や文献史料はないものの作風から奈良仏師の作例と指摘されているものに東京国立博物館（中川寺十輪院旧蔵）毘沙門天立像、奈良・東大寺二天像、和歌山・金剛峯寺（旧大日堂安置）大日如来坐像、愛知・七寺観音菩薩・勢至菩薩坐像、香川・與田寺不動明王立像、奈良・浄瑠璃寺大日如来坐像、岐阜・横蔵寺大日如来坐像、文化庁菩薩坐像、クリブランド美術館菩薩坐像等がある。現在知られる平安時代の奈良仏師の作例は、ほとんどが関西地方に伝わり、東国伝来の尊像は瑞林寺地蔵菩薩坐像が知られるにとどまる。

本像とこれらを比較すると北向山不動院像と似通ることがみてとれ

る。尊格は同じ不動明王であるが、不動院像は左目をすがめ口をへの字に結ぶ十九観の不動明王、右足を踏み下げる坐制、像高一三〇・二cmで表情や坐制、像高など異なる点は多々ある。しかし、形状や構造のうえでは共通点が多いことが指摘できる。まず、面貌表現をみると、頬と顎にたっぷり肉付けする点がよく似る。特に頬の膨らみは本像では下唇を噛んで頬が上がる状態をよくうつしており、不動院像は口をへの字に結んで頬に力が入る表現である。やや細かい部分になるが両像の耳の形は、対珠をほとんどあらわさない点特徴的で、上脚下角の間が不明瞭で三角状を呈する点も共通する部分として挙げられる。また、作風だけでなく構造の面にも共通点が多い。玉眼の嵌入、上膊半ばで細かく短く木寄せ法、別材を貼り付けた条帛、平滑に処理された内割り面が挙げられる。本像の着衣形式は、下半身に折り返し付の裙・腰布・腰帯の三種類の衣を着ける形式である。平安時代の不動明王の立像にみられる比較的一般的な服制で、久寿元年の京都・峯定寺不動明王立像等、平安時代を通じてみることができ、奈良仏師の作例としては矧ぎ目に「僧康慶」の墨書がある十二世紀の與田寺像がある。坐像では裙と腰布の二枚とするものが多く、本像のような三枚の布を着けた作例は少ない。

背面での衣の処理の仕方を見ると、本像は背面で腰帯の上縁を折り返す。このような背面の衣の処理は、いずれも腰布とみられる衣の上縁を折り返す長岳寺兩脇侍像、北向山不動院像、円成寺像にも認められる。運慶や快慶の菩薩や明王の坐像には裙の折り返し部を腰布で覆う形が多くみられ、奈良仏師の作例の指標ともなっている<sup>10)</sup>。一方で、本像のように裙の折り返し部を腰布及び腰帯で覆わない形は、立像の不動明王像ではいずれも運慶作の願成就院像や浄楽寺像、坐像では肥後定慶作との指摘がある鎌倉・明王院不動明王像にみることができ、如来や菩薩ではこ

の形式は珍しいことが指摘され、やや時代が下るが運慶作の可能性がある東京真如苑真澄寺大日如来坐像、同じく運慶作の可能性が指摘される栃木・光得寺大日如来坐像、和歌山・金剛峯寺孔雀明王坐像（快慶作）、静岡・瀧山寺聖観音菩薩立像、奈良・安倍文殊院文殊菩薩像、逗子市・神武寺伝阿弥陀如来坐像が知られる。本像はこれらに先行する裙の折り返し処理をしている作例といえるだろう。

玉眼の嵌入は長岳寺阿弥陀如来及び兩脇侍像が造像年代がわかる最も古い例で平安時代の奈良仏師の作品にみられる技法である。そのことを重視するならば、本像の製作年代は、十二世紀半ばから後半とみるのが妥当であろう。平安時代の要素が多くみられることから、一一六〇年から一一七〇年代の康慶やその周辺の奈良仏師の手によるものと考えられる。北向山不動院像は文治二年（一一八六）の静岡・願成就院不動明王立像につながる先進的な作風が知られ、本像はこの二像をつなぐ與田寺像と同様な時期の作例として位置付けることができよう。

相模国の現存作例には、本像のように平安時代の奈良仏師の作風を示す仏像はほとんど知られていない。本像は、相模国内で玉眼を嵌入する最も古い作例の文治五年の浄楽寺不動明王像や毘沙門天像に先行する仏像として評価できるだけでなく、瑞林寺像と並ぶ東国における数少ない平安時代の奈良仏師の作例として貴重である。

### 三 京・奈良から運ばれた仏像

『吾妻鏡』の記事から鎌倉時代の相模国分寺の一端を知ることができ、建久三年（一一九二）八月九日条の北条政子の産氣加持をおこなった相模国の寺社中に、「国分寺一喜下<sup>13)</sup>」と見え、同五年十二月二十七日条には、源頼朝が近国の一宮と国分寺の修復をすべきことを命じている。幕



府は同年四月二十日に、相模国中の寺社に恒例の仏神事を今まで通り執り行うことを三浦義澄に命じ、同二十七日には、相模国中の寺社の草創についてまとめさせるよう命じた。この頃、幕府は相模国の寺社の情報を集め修理を施している。本像もこのような幕府の近隣寺社への援助の一環で相模国にもたらされたことが推測できよう。

前述したように本像の伝来は不明で、誰がいつどのような目的で造像したのかはわからない。国分寺にいつ安置されるようになったのかも不明である。像高は八寸ほどで、持ち運びは容易である。

そこで、『吾妻鏡』から京や奈良で造られた仏像が鎌倉に運ばれた例を参考に見てみたい。『吾妻鏡』には南都で造られた不動明王像が鎌倉に運ばれ幕府で供養された記事がある。正治元年（一一九九）九月二十六日条である。

廿六日、乙卯、幕府に於いて、不動尊一体を供養せらる。導師は葉上房律師栄西、布施は被五重、裹物五、馬一疋なり。これ南都において、日来造立せらる、掃部頭親能の沙汰として、さる比之を召し下し奉ると云々。<sup>(14)</sup>

中原掃部頭親能が南都で不動明王像を造らせ、鎌倉に運ばせたことを伝える。この記事にみえる不動明王像は現存しないため、どのような仏像が造らせたのかはわからない。しかし、中原親能が南都（奈良）で造らせた点は作者を推定する重要な手掛かりとなる。

中原親能は幕府の文官で、東大寺大仏殿の盧舎那仏の右脇侍虚空蔵菩薩像の造営担当者として知られる。東大寺大仏殿の諸像の復興には康慶一門の仏師が関わっていることが知られ、虚空蔵菩薩像は康慶と運慶の

合作とされる<sup>(15)</sup>。わざわざ南都で造らせているところからすれば、東大寺大仏殿の造像以来、康慶や運慶を中心とする奈良仏師と中原親能との関係は継続しており、康慶一門に注文したと考えるのが自然である。

実際に大仏殿の造像を割り当てられた御家人と東大寺や担当仏師の関係がうかがえる例がある。左脇侍観音菩薩（如意輪観音）像を担当した宇都宮氏である。観音像は宇都宮朝綱とそれを継承した頼綱が担当した。宇都宮氏は、父祖以来東大寺との関係を継承し、朝綱や頼綱の供養のため建長二年（一二五〇）、正応五年（一二九二）に大和国内の田地を東大寺に寄進している例があり、観音像の造像を期に宇都宮氏と東大寺の関係は続いた<sup>(16)</sup>。また、造仏を担当したのは仏師快慶と定覚で、朝綱開山と伝承される尾羽寺の後身栃木・地藏院の観音・勢至菩薩像は快慶の手によるものではないかとの指摘がある<sup>(17)</sup>。宇都宮氏ゆかりの寺院に快慶の作風に近い仏像が伝来するのは興味深い<sup>(18)</sup>。

康慶の生没年は不明で、正治元年にはすでに亡くなっているか、存命であつてもかなりの高齢であるため、その周辺の仏師、例えば虚空蔵菩薩像を担当したもう一人の仏師運慶や快慶らが関わったと推測される。

このように十二世紀末には奈良で造らせて鎌倉に運んだ仏像や奈良仏師が手がけた現存する仏像が知られることから、本像も同様に奈良仏師によって造られ、国分寺にもたらされた可能性は十分考えられる。

もちろん勝長寿院本尊阿弥陀如来坐像のように奈良仏師の成朝が鎌倉に下向して造られた仏像があり、関東で造られた可能性も残っている。いずれにしても本像の優れた作域を考慮すれば、本像は鎌倉幕府と関係の深い奈良仏師の康慶一門やその周辺の仏師によって造られたと考えられよう。

#### 四 大山寺不動明王との比較

不動明王像には数種の凶像系統があるが、本像の姿は、頂蓮をいただし、総髪とし、正面を向いて両目を開き上歯を下唇を噛んでおり、右足を上にして結跏趺坐をする。これらは九世紀初頭に弘法大師空海が請来した不動明王の凶像をもとにしていることから高雄曼荼羅様や弘法大師様と呼ばれる<sup>(19)</sup>。承和六年（八三九）の京都・東寺講堂不動明王坐像を代表的な作例とする。東寺像は首を振り右斜めを向く。本像は真正面を向く姿で、顔の向きが異なるが、弘法大師様のバリエーションの一つとみなされる。

このような正面を向く弘法大師様不動明王像の作例には、九世紀の和歌山・正智院像や十世紀の京都・遍照寺像などがあげられ、それ以後も日本各地で数多くの作例が見いだせる。すべての作例と比較することは難しいので、平安時代から鎌倉時代にかけての相模国の作例をあげてみよう。<sup>(20)</sup>

十二世紀	伊勢原・大山寺	木造	坐像	独尊
十三世紀	同	鉄造	坐像	脇侍二軀
十三世紀	鎌倉・覺園寺	鉄造	坐像	独尊 <sup>(21)</sup>
延慶二年（一二〇九）	小田原・宝金剛寺	木造	立像	脇侍二軀

このようにみると宝金剛寺像以外は大山寺に關係することがわかるだろう。相模国では大山寺が不動明王の霊場として平安時代頃より信仰を集めていた。『吾妻鏡』には相模国分寺と同じように鎌倉幕府の庇護を受けられたことが見受けられ、鎌倉時代初頭に幕府の法会に参加する人員を輩出できるような多くの僧を抱えていた大寺院である。

本像と製作年代が近いのは、大山寺に伝わる平安時代の木造不動明王



図 14 不動明王坐像 鉄造 伊勢原市・大山寺



図 13 不動明王坐像 木造 伊勢原市・大山寺

像(図13)である。大山寺木造像は本像に先行する十二世紀前半の作例とみられる。顔つきが精悍でやせており彫眼で、構造上では頭体幹部を正中で左右に矧ぐ木寄せである。正面を向く姿や左耳前で髪束を編み込んで弁髪とする点が似る。面部の表現は十二世紀半ばの大山寺鉄造像(図14)に近い。頬や顎の肉付けをする点、その額にしわをあらわさない点が特徴的な共通点と指摘できる。

大山寺は、国分寺から相模川をはさんで西に二〇キロメートルほどに位置する大山に所在する。国分寺の旧境内からはちょうど富士山を隠すように大山がみえる。距離的にも近いことから、これらの像にはなんらかの関係があると考えてよいのではないだろうか。例えば、本像は鉄造不動明王像以前の大山寺本尊像の模刻像である可能性が考えられるだろう。同じ図像(彫像・絵画)を参考にした可能性もある。本稿では二像の形式の類似を指摘するにとどまるが、国分寺と大山寺、相模国の中でも重要な二か寺に伝来する不動明王像が正面を向く弘法大師様の姿であることは注目される。

註

- (1) 山田泰弘「古仏微笑―かながわの仏像―」(朝日新聞社、一九八五年五月)。
- (2) 海老名市の市史編纂事業にともなう市内彫刻悉皆調査の調査書及び写真は神奈川県立歴史博物館に保管される。国分寺の諸像調査の概報は、薄井和男「海老名市仏像彫刻悉皆調査の中間報告(四)〔最終回〕」(『えびなの歴史―海老名市史研究―』一、二、二〇〇二年三月)に掲載される。
- (3) 神奈川県立歴史博物館編『相模川流域のみほとけ』図録(神奈川県立歴史博物館、二〇二〇年十月)。
- (4) 神野祐太『二〇一八年度～二〇二〇年度 科学研究費助成事業 若手研究 研究成果報告書 相模川中流域の仏像彫刻に関する調査研究』(二〇二二年三月)。
- (5) 詳しい法量は左記の通り(単位はcm)。
 

頂―顎	九・八	面長	五・八
面幅	五・四	耳張	七・四
面奥	八・二	胸奥(右)	八・八
腹奥	九・二	肘張	二〇・一
膝張	二四・八	膝奥	一八・四
膝高(左)	五・二	同(右)	五・四
- (6) 『新編相模国風土記稿』は国立公文書館所蔵の旧内閣文庫本を参照した。
- (7) 中山每吉・矢後駒吉『相模国分寺志』(海老名村、一九二四年十二月)。
- (8) 国分寺所蔵の什物帳については押方みはる氏より御教示を得た。
- (9) 伊東史朗「安楽寿院不動堂本尊(北向不動)と仏師康助(上)」(『仏教芸術』二二六四、二〇〇二年九月)、伊東史朗「安楽寿院不動堂本尊(北向不動)と仏師康助(下)」(『仏教芸術』二二六六、二〇〇三年一月)、奥健夫・飯田雅彦「北向山不動院不動明王坐像の修理について」(『仏教芸術』二八〇、二〇〇五年五月)。
- (10) 山本勉「円成寺大日如来像の再検討」(『国華』一一三〇、一九九〇年一月)、佐々木あすか「平安時代末期から鎌倉時代初期奈良仏師の新形式形成とその展開」(『美術史』一六一、二〇〇六年十月)、佐々木あすか「平安時代末期の奈良仏師による新形式・新様式の形成過程と二一七〇年代の康慶・運慶―長岳寺阿

- 弥陀三尊像・円成寺大日如来像・瑞林寺地藏菩薩像の比較を中心に」(『仏教芸術』二、二〇一九年三月)。
- (11) 山本勉「逗子・神武寺伝阿弥陀如来像考」(『金沢文庫研究』三一六、二〇〇六年三月)。
- (12) 奥健夫『奈良の鎌倉時代彫刻』(『日本の美術』五三六、ぎょうせい、二〇一一年一月)。
- (13) 『国史大系』本、四六九頁。平安時代から鎌倉時代の相模国分寺の所在地については様々な見解があり、相模国分尼寺との関係についても議論がある。本稿では平安時代から鎌倉時代の所在地については触れない。中世の相模国分寺については、海老名市編『海老名市史』六(海老名市、二〇〇三年三月)、荒井秀規「相模国分僧寺・尼寺と漢河寺・龍峰寺および下寺尾廃寺―史料と伝承、そして廃寺との関係―」(『論叢古代相模Ⅱ編集委員会編』『論叢古代相模Ⅱ』、相模の古代を考える会、二〇一二年八月) ほかを参照。
- (14) 『国史大系』本、五六〇頁、訓読筆者。この不動明王像は、幕府において導師兼西が供養したといい、この年の一月には將軍源頼朝が薨去していることから、頼朝の仏事に関係する造像であった可能性は高い。栄西は翌二年に実施された頼朝の一周闋の導師を務める。
- (15) 弘安七年(二二八四)の東大寺大仏殿図(京都・醍醐寺蔵)、『東大寺統要録』(『国書刊行会』二〇一三年五月、二二～二三頁)、京都・醍醐寺『吾妻鏡』建久五年六月二十八日条(『国史大系』本、五〇七頁)。なお、東大寺大仏殿図と『東大寺統要録』では「藤原親能」とする。
- (16) 永村眞「中世宇都宮氏とその信仰」栃木県立博物館編『中世宇都宮氏―頼朝・尊氏・秀吉を支えた名族―』(栃木県立博物館、二〇一七年九月)。
- (17) 大澤慶子「快慶及びその周辺作品にみる来迎形阿弥陀三尊像の成立と展開―益子・地藏院の観音・勢至菩薩像を中心として―」(『仏教芸術』二九六、二〇〇八年一月)。快慶作品が下野国に伝来した可能性として鍔阿寺開山の僧理真が伊豆山の僧であったことを指摘する(山本勉『東国の鎌倉時代彫刻―鎌倉とその周辺―』『日本の美術』五三七、ぎょうせい、二〇一二年二月)。
- (18) 東国には快慶の作風を示す仏像はすくなく、その真作は栃木・真教寺に伝わる阿弥陀如来立像や現在は広島・耕三寺の所蔵になる静岡・伊豆山神社下常行堂に安置された宝冠阿弥陀如来坐像がある(奈良国立博物館編『伊豆山神社の歴史と美術』図録、奈良国立博物館、二〇一六年二月)。ほかに作風の類似が指摘される静岡・鉄舟寺菩薩坐像、同新光明寺阿弥陀如来立像、鎌倉・教恩寺阿弥陀如来及び両脇侍像、埼玉・東善寺阿弥陀如来像が知られる。
- (19) 不動明王像については、成田山新勝寺・種智院大学密教学会編『総覧不動明王』(成田山新勝寺、一九八四年四月)、中野玄三『不動明王像』(『日本の美術』二一三八、至文堂、一九八六年三月)、滋賀県立琵琶湖文化館編『不動明王―怒りと慈悲のほとけ―』(滋賀県立琵琶湖文化館、一九九六年十月)、奈良国立博物館編『明王―怒りと慈しみの仏―』図録(奈良国立博物館、二〇〇〇年四月)を参照。
- (20) 山北町常実坊に安置される春日厨子に安置された不動明王立像の製作年代を鎌倉時代とする見解がある。ただ不動明王像はもともと園城寺に伝来したので除外している。神奈川県内では、ほかに武蔵国域の横浜・市称名寺の不動明王立像二軀(称名寺護摩堂安置、旧海岸寺本尊脇侍)等が知られ、相模国周辺では国の静岡・願成就院不動明王立像、駿河国の建穂寺不動明王立像などがある。
- (21) 覚園寺鉄造不動明王坐像は覚園寺の近くにあった大明寺に伝来した由緒をもち、大山寺鉄造不動明王像の試みの不動とされ、鉄造であることはもちろんのこと右肘を張る姿勢や顔つきがよく似ている。修理前の画像には目に水晶をかぶせて、大山寺像の玉眼を参考にした姿であったようだ。
- (22) 清水真澄『かながわの平安仏』(神奈川合同出版、一九八六年六月)、伊勢原市教育委員会編『伊勢原の仏像』(伊勢原市教育委員会、二〇〇〇年三月)、神野祐太「伊勢原市・大山寺の木造不動明王坐像について」(『神奈川県立歴史博物館だより』二〇五、二〇一七年六月)。

図版出典

- 図1～図11 神奈川県立歴史博物館保管（井上久美子撮影）
- 図12 山本勉『新版仏像―日本仏像史講義―』（平凡社、二〇二〇年六月、一八七頁）より複写。
- 図13 伊勢原市教育委員会編『伊勢原の仏像』（伊勢原市教育委員会、二〇〇〇年三月、五四頁）より複写。
- 図14 同書七頁より複写。

〔付記〕

本稿は二〇一八～二〇二二年度科学研究費若手研究「相模川中流域の仏像彫刻に関する調査研究」（一八K一二二五二、研究代表者：神野祐太）の助成を受けた研究成果の一部です。

〔謝辞〕

本稿をなすにあたり、調査及び画像の掲載につきまして国分寺住職山縣和昭様より多大なるご高配を賜りました。また埼玉・正傳院坂東隆秀様のご協力とご高配を賜りました。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。